

## ごあいさつ

このたび昭和館では、「<sup>がれき</sup>瓦礫の中からの復旧～アメリカ人から見た戦後の日本～」と題して写真展を開催する運びとなりました。

本年は、終戦60年という節目の年です。先の大戦で日本各地は多くの街が破壊され、数多くの人びとが家を失い、家族を失いました。終戦により空襲の恐怖から逃れることができましたが、生活面では多くの苦勞が待ち受けていました。それでも人びとは希望を捨てず、どん底から抜け出る一步を踏み出していったのであり、その意味で戦争が終わった昭和20年は、戦災からの「復旧元年」と言い換えることができます。

日本は終戦とともに連合国の統治下におかれ、進駐軍が各地に駐留するようになり、随行したカメラマンが戦後の日本を撮り続けました。

これらの写真は、現在、アメリカなど海外の資料館に膨大な枚数が収蔵されており、貴重な資料です。昭和館では、こうした写真の所在を調査・収集し、日本人が撮った写真とともにこれまでに多くを公開してきました。

今回の写真展では、廃墟となった街角から立ち上がり復旧を遂げつつある日本の姿を、戦争の傷跡が残る日本各地の様子をはじめ、人びとの様子や戦災処理をしつつ復旧に向けて励む人びとの様子、そして子供たちの生活や表情など、アメリカ人の目から見た光景として、未発表写真を含めて紹介いたします。



東京の様子を撮影する進駐軍カメラマン

●撮影地 東京 昭和20年